

# 女学生の広島被爆体験

## 紙芝居 『なけなかったひろこちゃん』 より



昭和二十年八月六日午前八時十五分、ひろこちゃんには忘れられない数字です。  
八月六日の空は本当に雲一つない澄みわたった綺麗な空でした。  
その日、お母さんは田舎にいる病気の弟のところへ行っていたので、お父さんとふたりで家にいました。



その日は、敵の攻撃を知らせる警報も出ていませんでした。  
朝ごはんを食べて、お父さんと話している時、敵の飛行機の音がして、その瞬間ものすごい光と恐ろしい力の風が・・・



何がおきたのかわかりません、廊下をぐるぐると飛ばされて、台所の土間にたたきつけられていました。  
窓ガラスが粉々に割れ、顔も手足も血だらけでした。



手足の血を洗ってこわれた座敷の方へ行くとお父さんが倒れていました。左胸、丁度心臓の所が割れてピンク色でした。不思議なほど血は出ていませんでした。「お父さんはもう駄目だ」と言い、しばらくして、お父さんは息を引きとりました。黒い雨が降り、夜は近所の方の家の隅においていただきました。



次の日近所の人がおとうさんを戸板に乗せて中学校に運んでくれました。校庭には何百もの死体が並べてありました。全身火傷で、着ていた服は全部焼けて皮膚と肉が離れ、透明なビニールの袋をかぶせた様な状態で死んでいました。調べが済まないと焼く事ができません。



ちんちん電車の駅の近くの伯母さんの家へ歩いて行きましたが、一面の焼野原で、伯母さんの家は跡形もありませんでした。ちんちん電車は鉄の枠だけが残っていて、歩いている人は虚ろな瞳でとぼとぼと力なく歩いていました。





三、四日して、調べが済んだと連絡があり、中学校のグラウンドでお父さんを焼きました。本当に悲しく、つらかった。見つけてきた小さな木の箱にお父さんの骨をいれました。



何日かして、汽車が動きだし、遠くの駅まで歩いて汽車に乗せてもらいました。ただお母さんのところへ行きたい、それだけでした。お母さんの顔を見るまで一滴の涙も出ませんでした。お母さんの所に行けたのは八月十六日位だと思います。そこでお母さんを見て初めて泣きました。お母さんに、「ひろこちゃんが助かってくれてよかった」と言われて涙が出て止まりませんでした



お母さんも兄弟も亡くなりました。私だけが残されているのは、『何かしなさい』と言われて思うように思い、体はつらいのですが、家族に助けられ、みなさんに原爆のことを、語り継がせていただいています。皆さんにお願いです。今の世の中に原子爆弾などがあってはいけません。皆さんが核をもたないように考えてください。



嶋田寛子さん

これは、嶋田寛子さんの体験をもとに堺原爆被害者2世の会が「紙芝居」にしたものです。やさしい絵で子どもたちにもわかりやすいよう文章も簡潔にしています。2世が被爆者の体験をいかにして伝えていくか？という一つの試みです。